

Title	第 29 回教育改革シンポジウム：質疑応答の概要
Author	飯吉, 弘子
Citation	大阪市立大学大学教育. 19 卷 1 号, p.57-61.
Issue Date	2022-03-31
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20220318-010

Placed on: Osaka City University

■ 質疑応答の概要

第29回教育改革シンポジウム 質疑応答の概要

飯 吉 弘 子 (企画および司会担当)
大阪市立大学 大学教育研究センター副所長・教授

今回のシンポジウムでは、吉川卓治先生の基調講演および辰巳砂昌弘先生のコメントのあとに、参加者からのオンライン上の質問フォームに記入された質問・コメントに対して、吉川先生と辰巳砂先生に回答やコメントを行っていただいた。フロアの荒川哲男学長からのコメントも含め、以下に、その概要を紹介する。

1. 吉川先生への質問と回答

【吉川先生への質問①—大阪医科大学の労働生理学について】

大阪医科大学でいち早く労働生理学に注目されたことについて、現在は産業医科大学がその立場に変わっているが、どうしてそのようになったのか。公害への対策に対する貢献度についても、もしご存じだったら、ご教示いただきたい。

【吉川先生回答①】

この点についてはあまり深く突き詰めて調べてはいないが、府立の大阪医科大学の時代から、その後、佐多愛彦学長が大学を辞めて、大阪医科大学は大阪帝国大学の医学部になっていき、その過程で労働生理学の授業はなくなっていったと理解している。

とくに産業に関わる、産業医学等の研究の中心が移動していった理由は、よく分からないが、戦時下での、例えば、暉峻義等（てるおかぎどう）などがかなりイニシアチブをとって進めていったことと関係しているのではないかと、という程度しかお答えができない。

それから、公害についても、多分、戦前においては、公害のことが主題として大学の中で取り上げられるというよりも、佐多の考えた労働者のための労働生理学が、長時間労働をさせるのは労働力を食い潰してしまうので、時間を短くして健康を損なわないようにする

という程度のところにとどまっていたように、その時代の中での限界というのがあったのではないかと思っている。公害のことが取り上げられていくのは、むしろ戦後のことではないかなという感じがしている。

【吉川先生への質問②—「国立大学のコピーではない」について】

「国立大学のコピーではない」ということについて、もう少し詳しく教えていただきたい。

【吉川先生回答②】

関が「国立大学のコピーではない」と言ったのは、まさに、官立の総合大学をつくるべきだというような議論への対抗であって、つまり、国立大学と同じものをつくるのであれば、わざわざ大阪市がお金を出す意味がなくなってしまうということだろうと思う。

そのため、どの辺りで差異化していくかを考えたときに、やはり大阪市という都市の特性を背景にした学問を創っていかなければいけないということで、国立大学のコピーでない、都市を背景にした学問の創造だということを関が言ったのだと理解している。

【吉川先生への質問③—総合大学としての公立大学の責務・意義について】

先の質問のご回答で、総合大学と国立大学など幾つかキーワードが出ていて、それらとも関わる別の質問であるが、総合大学としての公立大学というものの意味とか意義、位置づけについてはどのようにお考えか。

また、今回の大阪市立大学と大阪府立大学の統合によって、より大規模化し、より総合大学化するとも言えると思うが、そのような新大学、大阪公立大学の責務、意味、意義や先生からのご期待、エールのようなものがもしあれば、ぜひお考えをいただければと思う。

【吉川先生回答③】

個人的な考え方になってしまうが、現在の状況を考えてみるとかなり色々な物事が複雑化していて、そういった問題にアプローチして解決していくためには、多分、単純な学問を並べるだけでは駄目で、それらを総合していくことがどうしても必要になってくるのではないかなと思う。

それは公立大学の場合も同じで、1つの地域の中の問題を取り上げるにしても、単純に1つの学問で解決できるようなものではなく、様々な知見を寄せ集め、皆で総合して考えていくことが求められていくと思うので、そうなったときに、やはり総合大学という存在は、力を発揮するのではないかなと思っている。

【司会】 とても重要なご指摘で、これから我々も受け止めて考えていかなければいけないと思いつながら伺った。

【吉川先生への質問④—地域と公立大学について】

ご講演の中の「地域」とは何かという点について、すなわち、公立大学は、役所ではなく市民や住民のためにあるということと、それは大学で行われる学問の専門性を発揮することで成し遂げられるという点、および実際の市民や住民に学問・研究を届けるのは簡単ではないが、市民や住民に、大学の専門性を生かした大学の役割を実感してもらう手立てなどについて、どのようにお考えか。昨今の状況を見ても、この辺りが重要ではないかと思われるが、いかがか。

【吉川先生回答④】

多分、様々なレベルがあり、一足飛びに学問の成果を皆に全て分かってほしいと持っていくのは無理だろうと思うし、逆に、そのことでかえってゆがみが出るのではないかなとも思う。

公開講座を開いて分かってもらうとか、勤め帰りの人に話を聞いてもらうとか、家庭にいる人に出てきてもらって、一緒にある本を読んでみる等は、分かりやすいことではあるが、そのレベルで学問を届けなければいけないとは必ずしも考えなくてもいいのではないかなと考える。例えば、新聞の中で先生方がいろいろな事象についてコメントをするということであっても、それもある意味その地域の人たちに届くわけである。少し話がそれるが、かつて大阪朝日新聞の戦時中の記事を集めて、どの大学の人々がどの程度発言しているか

を数えたことがある。その結果、一番多かったのは大阪商科大学の先生だった。河田嗣郎などは、有名な学長だったが、彼の発言は非常に多かった。京都大学とか大阪大学の先生よりも、大阪商科大学の先生がやはり一番多かった。ということは、それなりにかなり意識して自分たちの研究や考えていることを、メディアを通じて発信していたのだろうと思う。

つまり、先生方が多様な研究に取り組んでいく中でその結果を、様々なチャンネルや機会があると思うので、それらを通して世の中に発信していく形で進めていくのが、ゆがみのない形ではないかなと考える。

【司会】 大変重要なお提案、ご指摘をいただいたと思う。

2. 辰巳砂先生への質問と回答

【辰巳砂先生への質問①—地域と公立大学について】

今の吉川先生への質問は、辰巳砂先生にもお聞きしたいのご指名が来ている。「地域」とは何か、また、地域に対して学問の専門性を発揮することで還元していくということや、実際に市民、住民に学問研究というものを届けることの困難さをどう越えていけばいいかという点について、ご意見があればいただきたい。

【辰巳砂先生回答①】

吉川先生がおっしゃったとおりだと思う。地道に様々なことをやっていく必要があると思うが、新大学になることで変わるという意味で言うと、やはり今までよりもさらに開かれた、市民の方が、自由に出入りできるような大学にしていくことだと思う。これまでは、地域の人にとっては、少し敷居が高いという面があったのではと思う。新キャンパスの森之宮も、ライブラリーもそのようなコンセプトで考えている。住民の皆さんにはそのようなところからまず感じていただかなければ、「大学が本当に役に立っているのか、私たちのためになっているのか」ということは分かってもらえない。別の言い方で言えば、垣根をできるだけ低くしていく必要があると思う。大学の中の人たちに対してもそうだが、周辺の地域の人々に対してもそのようにする必要があると思う。

産学官の連携や、共創はもちろんであるが、そこに自治体が入ってきて、「この大学に行くと、企業の人もあるし、役所の人もあるし、もちろん学生もいるし、

留学生もいるし、面白いところだね」となることが重要。ここに来たら面白いことがあるし、分かることが何かあるのではないかとこのところから始めて行く。そして、専門的なところは最後についてくるのではないかと考えている。

【司会】 お二人の先生のお話を総合して、どうしていけば良いかが見えてきているように思う。もっと地道な努力を積み重ねていかないと、多分、そういう大学での学問に対する理解がなかなか得られないということかと思いつつ伺った。地道な努力を今後、新大学でも一層行っていければと思った。

【辰巳砂先生への質問②—新大学での国際交流や国際協働学習について】

辰巳砂先生には、この他、2点質問が来ているが、まず1点目は、新大学の教育構想についてご説明いただいた点について、新大学で学生たちにグローバルな視点で社会貢献できる姿勢を身につけてもらうための国際交流や国際協働学習の機会を、どのように展開されていくのか、もしお考えがあればお聞かせいただきたい。

【辰巳砂先生回答②】

貴重なご質問をいただき、ありがたい。こういう話は非常に重要である。これまで両大学で進めてきているので、まずはお互いどのようなことをやっているのかを把握し合うことが先決かと思っている。府大であれば、例えば少し細かい例だが、グローバルリーダー養成のための特待生制度などがあり、一方、市大では、例えばCOILなど、特徴ある学習があり、それらをまずは広げていく。今持っているものをまずは足がかりにして広げていく必要があるだろうと思っている。

また、国際交流の側面で言うと、まず基本的には、国際交流はダイバーシティを重視するという意味で、もっともっと外国人の方が普通に出入りするようなキャンパスにしていく必要がある。これも急にできるものではないため、来年開学後の私の任期の間に、少しずつでも多様な階層の外国人一本当は今、外国人か否かという分け方自体、センスを問われるかもしれないが一を、増やしていきたい。学士課程段階の留学生で、アジアから来ている今まで多かったタイプの留学生はもとより、欧米の研究大学からも非常に優れた学士課

程の学生さんたちにも研究目的で来ていただきたい。短期でも良いのでそういう研究留学生がたくさんいるような状況や、もちろん研究者ももっともっと増やしていく方向で、いきなりは無理だが、少しずついろいろな種をまいていきたいと考えている。

そのような中で、(当たり前の世界の中で、)国際交流や国際協働学習などは、今まで取り組んできたものや、国の制度など様々なものを利用しながら取り入れて、良いものを残していきたいと思っている。

【辰巳砂先生への質問③—新大学でスピーディーに対応する方策について】

2つ目の質問としては、以下の通りである。新大学は、これまでよりも組織体が大きくなり、ポリシーはあっても動きがどうしても鈍くなってしまおうということがあるのではないかと心配している。コロナ対策を見ても、経験を糧に先を見て、アジャイルでの進行をしていく必要があるかと思う。スピーディーに対応するための方策などには何かあるか。例えば、組織の人材活用、情報システムを使ったDX化など、いろいろあると思うが、先生のお考えはいかがか。

【辰巳砂先生回答③】

大変難しいご質問であるが、おっしゃるとおりで、組織が大きくなるので、小回りが利きにくくなるということが考えられる。先ほども申し上げたように、それほど急に、変化させることは難しいが、来年の4月が、ある意味、今までと比べると激変となるだろう。

これは、やはり今まで1つの、自分たちの大学のことしか知らなかったのが、もう1つ、同等サイズの別の大学と一緒にあって、様々な文化が交じり合い、制度的に異なるところなどを認識しながら共有していく過程で、恐らく激変する。これは非常に大きな速度で起こると思う。その中で良いものを残しながら、効果の薄いものはやめていくということ、これから半年ぐらいの間に、かなりスピーディーに行う必要があると思っている。

それから、DXや情報系のところはシステムの整備などが伴うので、できるだけ効率的にやりたいとは思いますが、一方で、組織が大きいので、なかなか難しい面もある。しかしその点は、個々の先生方の、なんというか、皆でやるという機運で乗り切っていければと思

う。このような機会は、非常に貴重な機会だと思う。今回の大きな大学統合が、本日正式に認可され、決まった話となった。絶対後ろには戻らずやるんだ、と皆さんにその気になっていただければ、非常に早く進むところは進むと思う。

自分ごととして捉えないと、「今までどおりでいいわ」と思っているとなかなか進まないと思うので、すみません、私に問われているのに、皆さんに振っているようで、申し訳ないが。できるだけ、やるべきことはスピーディーに、アジャイルにやりたいと思うが、例えば広報にしても、全員広報の形でやっていく必要があると思う。このOsaka Metropolitan Universityという名称は、いきなり無名の状況から始まるわけであり、海外も含めて、それを一気に知らしめるためには、教職員全員で広報するしかないだろう。

スピーディーに動かせるところは動かしながら、あとは、やはり地道に種をまきながら、完成年度は4年だが、4年後には非常に大きく変われるように、準備を着々と進めるべきだと考えている。

【司会】 すごく大変なこれからの見通しと、皆でそこに向かっていかなければいけないというエール、檄を飛ばしていただいたと捉えた。

市大でやってきた今回のような形のFDの集会は、講師の先生のご講演も拝聴してそこから学習をした上で、では皆でどうしていこうかと話し合う場として、これまで20年以上やってきた。今、辰巳砂先生がおっしゃったような、各教員が、こんな方法があるのではないかと、このように自分としては動いていきたいと思っているがどうか、といったことを皆で共有し合うことも大事だと考える。そういうアイデアや決意表明のようなものがあれば、フロア参加者の方々からもぜひ質問やコメントしていただきたいところだが、終了時間が迫っているため、最後にフロアの荒川学長からコメントをいただくこととする。また、それへの応答も行いつつ吉川先生、辰巳砂先生から最終コメントもいただきたい。

3. 荒川学長コメントと吉川先生、辰巳砂先生の最終コメント

【荒川学長から吉川先生、辰巳砂先生へのコメント】

吉川先生のご講演は、公立大学のあり方を歴史から振り返っていただき、貴重なご講演であった。感謝申し上げます。

ちょうど本日、この講演の直前に、新大学の設置が認可されたというニュースもあって、2022年度から新しいことが色々行うことができる楽しみも非常にあると思う。コロナ禍は、すごく試練でもあったが、ある意味ブレークスルーを起こすためのチャンスでもあったと思うし、それはまだ続いていると思う。苦悩だけではなくて、新しいものも発見していくことができた。例えばオンラインも、コロナ禍がなかったら多分進んでなかっただろう。そういったことの、良い面と悪い面についても見えてきた。

それと、オンラインで授業や会議をするようになったときに、改めて人の温かみやスキンシップといったものは、人類には欠くことのできないものであるということも見えてきた。今後、非接触の、いろいろなものを動かすデバイスなども出てくると思うが、やっぱりタッチする温かみを感じるのが、すごく大事なことだと改めて思い直す機会にもなったと思う。私は医学部出身だが、治療や診断のときに、「手当て」という言葉を使う。手を当てるということで、手を当てて、肌を触れ合うことが治療の出発点になるということもある。今後の新しい教育において、どうデジタルとアナログを組み合わせしていくかという点についても、このコロナ禍の中で、様々な考えることができたのではないと思う。辰巳砂先生、今後よろしく願いたい。

【吉川先生最終コメント】

ご質問やご意見は、私にとっても大変勉強になった。とくに最後、荒川先生がおっしゃった、デジタルと手当ての話については、どこの大学も今、やはり同じようなことを課題にしているのではないと思う。

感染予防のためにオンラインにすると、学生は皆と会いたいと言って対面の授業を求めるが、対面の授業をやると、だんだん(受講者)数が減っていくということもあるように、非常に試行錯誤している状況ではあるが、しばらくこのような両面作戦でいくしかないのではないかと考えている。

【辰巳砂先生最終コメント】

吉川先生のご講演、本当にためになった。公立大学がどのように成り立ってきたかや、大阪の話がたくさん出てきたので、本当に勉強になった。先生に述べていただいたような方向性に、公立大学のあるべき姿があると思うので、新大学にもぜひそのコンセプトを生かしていきたい。

それと、荒川先生のコメントにも感謝する。先生の指摘されたことは、とても重要なことで、われわれだけではなく、全ての大学や社会で考えなければいけないことである。われわれにとっては、この時点で、オンラインがかなり活用できるということが分かったのは非常によかったと思っている。キャンパスがかなり離れており、どのように対応するかという課題がある中で、オンラインが、会議にしても授業の補助にしても、かなり使えるということが分かったし、学会にしても、海外出張は何のために行っていたのかとまで思うこともあるが、とにかく、そのバランスが重要だと思う。ある目的のためには全て会議はオンラインでいいが、ある目的のためにはかなり密にリアルに相談しないといけない。大学での営み、学生を含めた営みというのは、まさにそのバランスを、どのようにして学生ファーストに構築していくのか、というところが重要かと思っている。今後ともよろしくお願ひしたい。

4. おわりに

【司会】 本日のご講演でのご紹介はなかったが、私は戦後の大阪市立大学の初代学長の恒藤恭の言説研究もしており、最近読み込んでいた中に、恒藤の「学園論」があるのを見つけた。大学とは、「学校」でありつつ、一方で「学園」が形成されているという話で、「学校」とは学習をする「目的協力体」としての場所であるが、一方で、授業だけでない様々な活動や地域との関わりや教員との関わりなど、教室以外も含む「共同社会集団」としての「学園」の側面もあるということが述べられていた。そして、その「学園」において、学生も皆、自律的に関わる中で、大学に対しての愛着や一体感などを得ていくということを、当時から恒藤は考えており、そのような「学園」形成の重要性に着目していた。

まさに昨年からは、オンラインの遠隔授業中心になっ

てしまい、学生が対面で大学に出てこられない状況の中で、そのような「学園」をどう形成していったらいいのか、ゆるやかな共同体としての愛着や一体感・帰属意識等を持ち、そこに自分が関わって、様々に活動しようと学生たちが思えるためにはどうしたら良いかという点について、最近よく考える。今後さらに、新大学になってキャンパスも分散し、なかなか顔が見えにくくなってしまいう中で、教職員も含め、皆でどうやって一体感を持って学生のためになる大学を創っていかれるかが、すごく重要な問題だと思っている。それは、先ほど辰巳砂先生がおっしゃったように、一人一人、教職員や学生、全員が、そこに向かって何かをしていると思わないと、そういう場は創れないということだろうと思ひながらお話を伺った。そして、それは地域の中でも形成していくことも大事だと、吉川先生のお話からも大変学ばせていただいた。

本日のご講演、コメントや質問全体に感謝する。新大学スタートに向け、これからの方向性を皆で確認でき、貴重な機会となった。今後、是非生かしていければと思う。